

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十八年九月十五日
第三種郵便物認可
發行(毎月一回・十五日發行)

(通第四一〇号)

次

目

親鸞聖人と私 池山榮吉 (1)

信仰体験録抄 安波勲八 (7)

水の味 高原憲 (11)

青蓮華(二) 井上善右エ門 (14)

慈光日誌抄 西元宗助 (16)

— 仏光讃嘆 —

池山先生聞き書 花田正夫 (19)

慈光

第三十五卷 第九号

親鸞聖人と私

池山榮吉

「かなしきはあくなき利己の一念を、もてあましたる男にありけり」(啄木)

あの時の私の気分は丁度そんなものだった。放逸な欲求に掴まれて、そのさいなみから逃れようと、もがく気さえも挫けてしまった。

従来若存若亡のたよりない状態になっていた私の幻影は、無論このときも消えていて、仏とは人間の妄想が造り出した概念に過ぎない、と思いきめなければならなかった。日頃出にくかった念仏が、てんで出て来ないばかりか、何方に向って通路を求めたものか、その見当さえもつかなかった。外界のままになる、ならないはさておいて、自分で自分の心をどうすることも出来ないとは、この時つくづく思ひ知らされた。自分の俯甲斐なきに思ひ到ると同時に、これまで私が生涯の目的として、たえず追求して来た名譽というものが問題となつて、結局自分は残念ながら、到底名譽を背負う資格がない——その主体となるべき自分が無力

だから——とあきらめなければならなくなった。

目的のなくなつた人生！何たる味気ないものだろう。

名譽などとそんな浮いた話をして居る場合でない。今現にこう悪い心がむく／＼と起つて来て、それを押えつげようとする良心が、ピシ／＼はねかえされる始末では、私の究極の運命は、この世からなる永劫の地獄の外にない。

私は絶望と恐怖そのものであった。人なき空曠のはるかなるところに、悪徒、猛獸、毒虫に追いつめられた二河白道の旅は私であった。

あ、こういう時に本統の信仰があつたならば、強烈な真信の願求に、息はずみ、胸はちきれんばかりになつた。迷子になつた幼子が、あわただしく母を尋ねるように、いらだつ心は、今度こそは真の仏を見つけようと、狂おしいまでにあせつた。

すると——真暗闇のなかに一点の光の浮び出たように——不凶胸に浮かんだのが「親鸞におきてはただ念仏して弥陀

にたすけられまいらずべしと、よき人の仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり」の文であつた。

二河白道を前にみて、進退きわまつた旅人の耳にはいつた東岸の発遣の音がそれであつた。

私の眼はこの文に見入つた。私の耳はこの文に聞き入つた。私の心はこの文に凝つた。

その刹那、焼石が水を吸い込むように、心の奥までこの文が浸み透つた。西岸の招喚の音が聞えたのであろう。私は心にある衝動を感じてハッと我に返つた。信仰の門をひらく手懸が見つかつたのだ。

私は、親鸞とあるのを私と読んで、よき人とあるのを親鸞聖人と読んだ。そしてその文を口の中で繰返したかと思つた途端——ドウと念仏が口を衝いて出た。瀧のみなぎり落ちるような勢で、しかもかつて覚えのないやすらかなさをもつて。今まで心を占めていたやるせないさびしさはいつしか消えて、何ともいえないたのもしさが心の底から湧き上るのを覚えた。これが他力の真境だな、とはじめて知つた時の心地！廣大難思の慶心とはこれを云つたのかと体験の上から推知される。

こうして聖人の御手引によつて大悲選択の願心にひきあわされ、ただ念仏の心のおこると共に、心光照護の境に置かれた。これは私の四十二の時であつた。

親鸞聖人と私

「平生のとき善知識のことばのしたに、帰命の一念を發得せば、そのときをもて娑婆の終り臨終とおもうべし」世にいう厄年に「前念命終」を体験して、それから今日まで「後念即生」の日暮しをして来たうちに、不思議の一つに数えられるのは、以前は口に出にくかつた念仏がやす／＼と称えられることと、仏の存在——体験後にあつては特に阿彌陀仏の存在——が、もう問題に上らなくなったことで、これが白道を進んで疑怯退心を生じない他力の金剛心——有漏の穢身に宿る——というものかと、われながらそぞろに勿体なく思うときがある。

「唯観念仏衆生、撰取不捨、故名阿弥陀」濁悪の群萌を悲引したまう如来、私達に間に合う唯一の御名。どうして南無阿彌陀仏と称えずにいられよう！

1922年
大正十一年

内に我心をみつめる

去年の暮頃のことであつた。明けて来年は開宗七百年にあたるそうだが、どうかこの機会に、聖人を手を取るようになり／＼と、自分も拝見し、人にも紹介したいものだ。それには一体どうしたらばよいだろうか？とじつと思索をこらしたのであつた。

まず第一に考えるまでもなく自明の方法と思われたのは、聖人の御一生をくわしく歴史的に詮索して、その真相を紹介することであつた。それには『御伝鈔』をはじめ、だん

いさ
さあ
どうか

だん文献もあるようだから、それらを一々調べて見ようか
と思つた。が、それは随分私に取っては一大仕事だし、
よしやってみたところで、果して私の想っているような聖
人が現前されるかどうか？まだ手もつけないうちから、早く
も疑が萌したのであつた。本統に専門的に立入つて深く研
究したならばいざしらず、い、加減の素人詮議で、ありふ
れた材料から、聖人の人格がこまかに、正確に、生々と、
浮彫にしたように顕われて来ようとはとても思われないこ
とであつた。

ひまへへ北は

いにしへのなべての聖賢とか、偉人賢士とかにしてみれば、私達は聞いたり読んだりして、多かれ少かれ知つて居るだけの材料で、趣味と必要の存する限り、ほぼその人柄の輪郭を想定する。それが私達のその聖賢とか、偉人賢士とかに就いて知つて居る全分であつて、私達はその想定に對して一氣に入ろうが入るまいが別段異議をさしはさむべき理由がない。

が、聖人にしてみると一人はいざ、私には一そうは行かない。私が聖人の筆に、口にせられた文言を知つて居るのは一少くともその深さに於て一僅かなものだ。聖人の御伝記については、殆んど知つて居るとは言われない。二三文献を読んだことはあるが、どれだけが果して歴史的に正確なものか考へたこともないのだから。

揚句、よう／＼聖人の在所をつきとめた自身の実験が、灯台もと暗しの譬も思い合はされて、おかしくもあり、とうとくも感じられる。

この実験があつてから、對聖人の關係が、革新されたとは思えないが、従来よりも一層緊密を加へた一むしろ融けて一つになつた、と云つた方が実感に近いかもしれないことは争えない。

「一人居て喜ばば二人と思ふべし。二人居て喜ばば三人と思ふべし。その一人は親鸞なり」の文にしても、以前は私が一人で喜んで居ると、聖人もすぐ傍に居られて、一緒に喜んで下さるのだ、とばかり思つていたのであるが、聖人の在所が知れた今では、私の喜ぶころのうちに、聖人の御喜びも流れているからは、私の喜ぶ心、即、聖人の御心とただだけ。「その一人は親鸞なり」のお言葉は、私達の喜びばかりでない、私達の歎き悲しむ場合にも、怒り狂う場合にも、その他煩惱具足の凡夫として、さまざまのあさましい情を馳せる場合も、母の子を想うような憐念の意味でくり返される。

「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじころにてありけり」すべてがこの調子だ。何のことはない、私達が迷い歩いて途方にくれそうになつたには、チャンと先へ廻つて待つて居て下さるのだ。

それでいて私には一斑をみて全貌をしようとでもいったものか一聖人がかなりわかつて居るような気がして居る。これこそ的確な史料に依つて調べあげた結果だ、と主張する者があつても、若しその結果が、私の想つて居る聖人と違えば、その調査が間違つてると、先天的な断定をさへ下しかねない確信がある。実を云うと私には、いにしへの固より現代でも、聖人ほどにわかつて居る人格はないのだ。

↓

私のはあの問題一どうしたら聖人をあり／＼と拝見することが出来るかという一を聞かぬが、とつおいつして考へた。その揚句一何時だったか今覚えなないが一或時不図おもいつたことがあつた。そしてその思いつきを、再び考へ一考した刹那、微笑がおのずから唇辺にただよつて来るのを覚えた。

それは外のことではない。まことの親鸞聖人を拝見しようと思へば、眼を外にばかり向けて居ては駄目だ。内にわが心を見つめると、そこにチャンと控えておいでになるといふことだ。これがその問題の解決として適当かどうかは知らないが、本統の聖人は、この方法を外にしては拝見出来るものでない、ということだけは確におもへた。

惟うにこれは別段珍らしい思いつきではあるまい。恐らく昔からそれと明言した人もあろうし、現にそう感得して居る人も多々あろう。ただ私としては、あちこち探し廻つた

煩惱具足の凡夫と「かねてしろしめして」、身を苦毒の中において、飽くまでも見捨てぬ大悲の悲願を、体現された聖人なればこそ、こつちも徹底した同感の態度に出られるのだ。

「踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へまいりたくそうらわんには、煩惱のなきやらんと、あやしくそうらいなまし」とあるのも、隔て心のやまぬ私達の逃げようにも逃げられないように、物見の上で見張つて居て、声をかけて下さるので、雲居寺の阿弥陀仏が、逃げる人の袖をとらえたという夢想も思い合はされる。

「悲しいかな愚禿親鸞、愛欲の広海に沈波し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることをよろこばず、真証の証に近づくことをたのしみます。恥ずべし傷むべし」と、聖人の歎きをうけたまわつては、罪業の織り出す幻影にあこがれて「あたらし身を仏になすな花に酒」と、苦惱の旧里を築とさへ見る錯覚に弄ばれる無慚な自分が見出される。

「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」何たる深刻な充実した真情の流露たるう！「よき人の仰せをこつむりて」信じたまうた際に、深く／＼刻まれた自己内面の披瀝とかがわれる。私達にはとてもこん

Cherry

なに周到で完全な、而も簡単で的確な、嬌々たる余韻をふくむ言い表しは出来ないにしても、心に思っている内容は實際その通りに相違ない。だからこの聖人の常の仰せは、私達の迷懐としてそのまま借用して差支えない。

総じて聖人が御一身にかけて仰言つた言は、聖人にしてみれば、ただ御自身のお感じを述べさせられたにとどまるのだが、私達から見れば、そのお言葉がそのまま私達へのおさとしときこえる。而もそれが煩惱熾盛の衆生として私達と同じ立場からの仰せだもの、私達の心に強い響を与えるところか、私達自身の内心の叫びとしか聞こえないことがあるのは、もとよりその所と言わなければならぬ。

「なにごとくも、ここにまかせたることならば、往生のため千人ころせといわんに、すなわちころすべし。しかれども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり。わがころすべくて殺さぬにはあらず。また害せじと思ふとも、百人千人を殺すこともあるべし」、「さるべき業縁の催せば、いかなる振舞もすべきぞかし」、「わるからんにつけてもいよく願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて柔和忍辱のころもいでくべし。すべてよろずのことにつけて往生にはかしこき思いを具せずして、ただほればれと弥陀の御恩の深重なることを、つねに思い出しまいらすべし。しかれば念仏も申され候」。唯田房はたび／＼聖人

私達に卜そのまま受入れられる。これは実に驚くべき他に類例のない不思議なことだ。

ところが、それよりもっと不思議なのは、私達が勝手なことを思ったり為たりすることが、きつと聖人の何れかのお言葉に関連して考えさせられることだ。「ながむる人の心にぞすむ」とは聖人にもあてはまる。これはどうでも私達の心と聖人の御心とが一つになっていて、私達の心の隅々まで聖人の御心が充ち満ちている結果とみるより外、解きようのない謎だとおもふ。

しかしまた翻って考えてみれば、そうあるのは当然のことだとも思える。私達には、聖人は私達と同格の凡夫として、横超の真教をひろめるために、この世に來化したまうた弥陀としか思えないのだから。

衆生の成仏のために、自分の成仏を賭けられた無碍絶対の仏心と、功德の体となるという煩惱成就の凡情とが、信樂開発の時尅の極促を合図に、一つに融け合うのに何の不思議があろう！

多生曠劫この世まであわれみかぶれるこの身なり

一心帰命たえずして 奉讀ひまなくこのむべし

子の母をおもろがごとくにて衆生仏を憶すれば

からこういう風に聞かされていたに違いない。

善いことをしたいにもしおうされず、悪いことをやめたいにもやめられず、二六時中、善悪の思うようにならないのに苦しんでる私達―七百年後の私達に、どれだけこのおさとしが、たよりになることであろう！「悪からんにつけてもいよく願力を」仰ぐようにならされた私達に、柔和忍辱なり、勇猛精進なり、臨機に當為の心が出て来ようとするのは、煩惱の水を菩提の水に溶かす大信海の転化作用とも謂つべきもので、この作用あればこそ、私達は「ただほればれと弥陀の御恩の深重なることを、つねに思い出しまいらせて」、わがはからいをはなれた自然法爾の妙境に自適して、底力のある生活をさせていただけなのだ。

後序

「流念難思法海」とは、こうした日常生活の推移を言つたものと解せられる。他面「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と、よき人の仰せに信順したところが、即「樹心弘誓仏地」に違いない。心が一旦弘誓の仏地に樹てられた上は、念はおのずから難思の法界に流れて行く。聖人のおよろこびは、すなわち私達の慶びである。

聖人のお言葉をこう云う風に並べ立てて一つ／＼味わつて行つては際限がない。要するに聖人のお言葉―それが悲歎のあれ、感謝のあれ、はた解釈のあれ、勸誡のあれ―一々皆私達に―随分意地わるく批評の眼で見る癖のある

現前当來遠からず 如来を拝見うたがわず

尽十方 無碍光の 大悲大願の海水に
煩惱の衆流歸しぬれば 智慧のうしおに一味なり。

大正十一年九月発行「教化」より

雲の峰

疲れたる旅人の

あふぎみる大空に

さまざまの姿して

わきあがる雲の峰

わきあがりやがてまた

くづれゆく雲の峰

あはれそのさだめなき

まどはしの姿かな

わがたどる運命の

はてしなき旅の空

われはまた日毎見る

たのみなき雲の峰

信仰体験録抄

安波勲 八

教と体験

我々が世に処するに自分の経験だけをもってしては向上進歩はおそい、経験ある人、偉人聖賢先輩の経験にしたがうがよろしい。即ち教を尊崇せねばならぬ。然し教そのものは我々の経験を経なければ、我々の本当の力にならない。大正四年の夏頃、私がまだ永楽病院の内科の医局に勤務中の時、或日医局にて雑談の折り、医局員の一人が得意げに語って曰く、

「今日重症患者を入院させた。今少し早く来れば必ず助け得るのであるけれども遅かったから何とも云えぬ。まあ一生懸命にやってみよう」と云っておいだから、死んでも心配なし、助ければ当方の手柄になる」と同君の所謂口療法をちよつと吹聴していた。傍にこれを聞いて居た恩師宮本博士おもむろに口を開いて曰く、

「私の友人に面白い漢法医があった。その人に子がなく

の望みがより多いのに惜しい事をした」と出そうだった。その時恩師の一言「汝如何なる場合にも手遅れしたと云うなかれ」が飛んで来た、そこでこれは破傷風であるから血清注射を試みるがよいと云って帰った。村医は自分の無経験で少しも思をそこに向けなかつた事を私に告白し懺悔した。かくて私は誰からも恨みを買ふ事もなく感謝せられ、しかも私の行わんとする治療には少しも差し間違えなかつた。私はこの経験によって今後如何なる事があつても手遅れしたと云うまいと決心した。即ち先生の教が私の経験によって私のものになった。

其後、開業満六年余り、私は先生の教を遵奉し、ひたすらその実行に努めたおかげで、診療上に幾多の利益を得、また他の同業者にも恨まれずに、愉快な日暮しをさせて貰うことが出来た。

宗教もまたそうである、仏の教によらなければ到底出離解脱は覚束ない。しかし教だけでは私の力にはならぬ、日常生活において、実際問題に遭遇した場合に、教を遵奉し教に従つて行動してみると、成る程と教の尊いことが分るかくて教は私の体験によって、私のものとなり、教が私の力となる。

教は我々求道者の燈炬であり、教は我々の体験によって益々深められ、体験が深められることによって我々は益々

て養子を貰う時の条件が振っている。その一つは九尺二間の長屋の泥板を車で乗り越さぬ人。その二つは如何なる場合でも手遅れしたと云う事を口にせぬ人、その三は何であつたか余の記憶にない。その二について先生は分註を加えられた。手遅れしたと云うて誰もためになる者は一人もない。患者は惜しい事をしたとくやしがり、家によっては姑と嫁の争となり、また医者相互の間の伸違ひともなる、得るところは何もない」

皮肉の内に忠言を忘れず、座談の中にも子弟を指導せんとする有難い温情、且つは経験ある人の教として深く私の脳裡に刻まれた。

翌年田舎にて一患者を診た、一診して破傷風であることが明瞭である。村医は三日前から此状態を診ていたのであるが、経験がなかつたので、何か頸部の外傷と関係があると考えて、少しも破傷風に考えを向けなかつた様だ。この時、つい咽喉元まで「三日前に診て血清注射をすれば回復

教の力を覚え、遂に教そのものが身についてくるのである。教は本である、而して体験をともしなかつた教は力である。

真の意味の死の宣告

(大正十五年六月七日)

死の宣告される人は多いが死の宣告を受け取る人は案外に少ない。

或人が私も四年前死の宣告うけましたと、よく聞いてみると或る医師から食道癌だから到底助からぬと云われたのだそう。そこで他の医師についてレントゲン検査をして貰いまた田舎の医師から処方された薬を根気よく用いていたらよくなりましたと云う、それで私は云うた。

「それは本当の死の宣告を受けたのではない、医師は死の宣告をしたかも知れんが、貴方はそれを受け取っていない。外の医師の治療を受けたのが何よりの証拠じや。したがって貴方の体験は真の意味の生死厳頭に立たれた体験ではない」と。その方も成る程とうなづかれた。

或る宗教家が拙著「死の宣告を受けて」を読んで「死の宣告を受けておるのは貴方に限つた事はない、私共も同じである。御文章にも、誰か百年の形体を保たんや、出る息は入るをまたず、等とすでに死を宣告されている」と云われた。

成る程、教によって死を宣告せられておるが、我々自身

はそれを受け取っていないのが実際ではないか。そこで本
当の意味の生死敵頭に立ち得ない、故に生死問題が實際問
題とならぬのである。

私の場合においては、医師が私に死を宣告し、私は医師
の死の宣告をそのまま受取っている。これが即ち真の意味
の死の宣告である。即ち真の意味の生死敵頭に立って居る
のである。私の様に長い間真の意味の生死敵頭に立って
居る者は少いであろう。この間に与えられたる体験は、私の
受ける特権である、と私は答えた。

(大正十五年六月二十六日)

消極か積極か

私の不治の病を聞いて東京の一友人から、中井式自彊術
を勧めてくれた。これに対し、御厚意は有難いが、自分の
病気の治療に対しては全く主治医にまかせてあるから私の
方で工夫する必要はない、それは主治医の領分であるとい
って例の私の療養の態度を書き送った。これに折返し、
「貴方が主治医にうちまかせてある事は感服の外はない
が、主治医は貴方の病気を根治し得る絶対の力を持たな
い事は死の宣告云々とあるのも明瞭である。されば主
治医にまかせて工夫する必要がないとは云われない。主
治医が病気を根治し得る絶対の力を持っている場合のみ
工夫の必要がないのです。それ故貴方自らも治療に対し

度こそ積極的ではあるまいか。

故に世間的には、人事を尽して天命を待つべきかも知ら
ないが、絶対という立場から云うと、天命を知って人事を
尽すべきである。罪悪深重の我を自覚して、この者が出来
るだけ正しい道を進まんと努力する態度こそ最も積極的
であると信ずる。

(大正十五年六月四日)

臨末の法語

私は永らく御厄介になりました。イヨ／＼臨終も近づき
お話も出来ませんが、有縁の御同行へ最後のお別れのお札
を述べさせて頂きます(称名)

遇々行信を獲ば遠く宿縁を慶べと親鸞聖人のお言葉があ
りますが、私の仏法を聞き、他力の大信心を得させて頂き
ましたのも、皆全く宿縁のお蔭であります(称名)

私は最早や食べ物も咽を通らず、飲み物も欲しくなく、
イヨ／＼臨終も近づいたことと思うが、幸に平素に戴いて
居った信仰の、間違つて居なかつたと云うことを、ますま
す深く味わうのであります(称名)

私は平常の時は、お慈悲を喜び、死に直面しても平気
であるとか、安心であるとか大きなことを云うて居りまし
たが、イヨ／＼となりては病苦に責められて、喜ばれもせず
念仏も出ず、ドコ／＼までもツマラヌ奴であるが、この者

工夫する必要がある。殊に不治の難症を治癒した人々の
体験を聞いて治療されるのが最善の方法であろうと思
います。とにかくあらゆる最善の合理的療法を試みて根治
すべきです。人事を尽して天命を待つのです。貴方の態
度は余りに消極的絶望的のようであります。もっと積極
的に強くあつて欲しい、病気を征服せんではおかぬとい
う態度、お心持になられるようひたすらお願いします」
という意味の事を書いて熱心に自彊術を勧めてきた。
私は成程そうだと思った。どうしてもよくならぬと云う
私の病気の実態を知らぬ人から見ると如何にも私の態度は
消極的絶望的の見えよう。然し私の病気の本体を本當によ
く知っている者には、不治の病でも主治医に任せておくの
が最善の方法であり積極的的態度である。私としては最も長
く生きる方法であるとわかる。

真宗では、人間は煩惱具足の身には善い事の出来ない、
罪の深い者と教えられる。それを門外漢から見ると、それ
は消極的で、何処までも善い事をしてみせる、出来るんだ
と考えて精進すべきであると考えるかも知れない。

然しいくら善い事が出来ると頑張ってみても、絶対には
本當の善は出来ないのが事実であつて、絶対によくなれる
と見ていたら必ず行き詰る。よくならぬ者をよくならぬ
ぬと見て、その者が出来るだけ善を行いたいと精進する態

をドコドコまでも見捨てずにお相手して下さる仏様の御真
実によつて満足させていただき、このドコでも仕様のな
い私を、相手にして下さる仏様のあると云うことが事実な
れば、仏様のお力によつて往生させて頂くことも、又さと
りを開かせて頂くことも間違いないのであります。
この信念は最後の近づくにつれ、いよ／＼はつきりさせて
頂きます。(称名)私がこの尊いお慈悲にあわせて頂きま
したのは、全く宿縁のお蔭であります。皆様もどうかこの
仏様の御真実に気づかせて頂かれんことを、最後のお別
れに当りお願いいたします。これが私の永らくお世話になり
ました皆様への御礼であります(称名)

尚終りに私のなくなつた後は、頼りすくない妻や、いと
けない子供や、年老いたる老母の事は皆様に呉々もよろし
くお願いいたします。合掌。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。

(大正十五年八月十八日)



水の味

高原 憲

家（その一）

— 殿 堂 —

この町に美津野泉青が開業して間もない頃であった。山の手の宏壮な邸宅にM博士が開業された。博士は永年ドイツに留学して帰朝されたのである。その当時から留学中であることが、時々新聞に報道されていただけに、町の人達の期待も大したものであった。その開業披露宴もすばらしいものであった。町の紳士淑女は洩れなく招待されていた。宴たけなわに及ぶと知名の士がこも／＼立って、博士の学識を讃えその開業を祝福した。同業者の故を以って、この華やかな祝宴の末席を汚していた泉青は、小さくなって博士のこの門出のすばらしさに胆を奪われていた。

泉青にも若い血が通っている。何と考へ直しても羨ましくて仕方がない。自分のみじめな姿が悲しくなつた。今までの小さな住宅をほんの申訳ばかり改造して、六畳の患者控室、三畳の薬局、六畳の診察室がとれた。これが泉青の

最初の診療所である。博士の豪華な病院を見ると云い知れぬねたましさを覚える。否一種の憤激をさえ感じて来たのである。なんだ、俺もきつと建ててみせる。成し遂げないでおくものか。彼はこみ上げて来る感情をおさえながら帰途についた。

美の殿堂、これが幻影となって泉青の心頭を去らなくなつた。空中楼阁を追うて、若い泉青はそれからせつせと働いた。

— 心 の 家 —

或日のこと、重症の患者を抱えて一人の母親が泉青のもとへ駆けつけてきた。とりあえず病室に入れて治療することになった。その頃の泉青の診療所もいくらか室も増えて幾室かの病室も用意されていた。病室といつても極めてささやかなものであった。だが、この病児の住宅に較べたら相当なものであった。この児の家庭は貧しくて、とても汚い家に住んでいることを知っていた泉青は、この児がきつ

家（その二）

— わ が 家 —

とおとなしく病室に落ちついていると思ひこんでいた。病室の方へ廻つて見た。これは驚いた、さっきの児は病室で泣き叫んでいる。「うちへ帰ろう！うちへ帰ろう！」と駄々をこねているではないか。なだめすかしている母親も困り果てた様子である。

泉青は思はず立ちつくんだ。彼が今まで追うていた空中楼阁は、この病児の叫び声で一瞬にして粉碎されてしまつた。何と愚かな我であつたらう。果てなき夢を追うていたのだ。美の殿堂、それがなんだ。純真な子供心には冷たい囚屋でしかないのだ。「うちへ帰ろう！」そうだ、心の家へ帰りたいのである。

彼が夢みていた殿堂を一瞬にたたきつぶされてしまつて、泉青は肩の重荷を投げ捨てたように楽になつた。彼は家族の唯一の休息所である七畳半の一室、それが泉青にとっては何体ない安住の天地となつた。頑^{ガム}はない病児も、のぼせ上つている泉青にとっては、こよなき善知識であつた。

泉青は時々山の手を通ることがある。博士のあの宏大な病院は、今は荒れ果てている。幾組かの世帯に分割されたアパートに転じている。垣は破れ、庭には雑草が生い茂っている。このありし日の殿堂の前を通るたびに、「うちへ帰ろう！」と云う泣声が、何処からともなく聞えて来るようにである。思はず泉青はお念仏するのである。

「私の病氣は治る見込みがありませんか。後のことも決めておかねばなりません。何年位もてましようか。はつきり聞かせていただきたいです。覚悟は出来ていきますので、何といわれましてもビクともいたしません。」

「ハアそうですか。誠に失礼な尋ね方ですが、この住宅は借家ですか、それとも……」

「まだ我が家を建てるまでに参つておりません。病氣が私のことですから。」

「借家ですか。では家主が、たつた今立退いてくれといつて来たらどうなさいますか。」

「冗談じゃない。五ヶ年の契約で借りています。」

「いくら契約できめていても、家主がせつばつまればやりかねないことです。たつた今立退いてくれと来たときの対策は？」

「そんな無茶なことはありませんまい。」

「そんな無茶なことが毎日起つているのです。あなたが何年位もてましようかという問題も、家の問題と同じです。まさか今日死神がやって来ようなどということは、ありはしないだろうと勝手に決めていられるから、悟つたような涼しいことが云えるのです。人生五十。これがたいい人

生契約です。だがこの家主は無情です。一度家主の御機嫌を損じたら、無情の風が吹きまくって、たった今立退かねばなりません。あわれというもおおろかなりです。たった今立退け！と死神がやって来たらどうなさいます？」

「……………」
「我が家のないものはルンペンです。立退き先がない。三界に迷う法界のルンペン、あわれと云うもおろかです。こゝなるに我が家を持っているものはどうでしょう。名残り惜しいことではあるが、住みなれし旧家を立ち退いてはじめて真実の我が家におちつくのです。娑婆の家は一切借家です。縁あって借りたこの家は、立退きの日まで大切に使用わなくてはなりません。」

何はともあれ、我が家をもつことが私共の最初の仕事であり、それが最後の仕事なのです」

「その我が家と申しますと？」
「この我が家は娑婆には建てられません。彼の土に用意されてあるのです。」

「私はお恥しながら我が家のことは忘れていました。」

「御心配無用、間違ひなく用意されています。そして真実の親様は、声をかぎりに呼び続けていられます。我々は無眼人、無耳人であるから我が家が見えません。声が聞こえません。」

青蓮華(二)

○人の世にとはの和やはらぎひらくべき御代のあけぼのに立ちにけらすや

この一首は、昭和二十二年新春の御歌「あけぼの」に白井先生が詠進入選された一首であります。即ち広島が原爆の惨禍と敗戦の荒廃のお生々しい昭和廿一年始め、先生は広島大学学生部長として寝食を忘れられた結果、病を得て広島の坂海岸で静養しておられたとき、来春御歌会の勅題が「あけぼの」と公表されたのを知られた数日後、「晩鐘」の歌人山隅氏が先生の病を見舞われ、氏を馭まで送られて寓居に帰られる途、静かにないだ海辺に立たれたとき、思わずはからずも、この一首を得られたのです。これに先き立って先生の心には、何とかして陛下のお心を慰め奉りたい、せめて国民の一人でも多く歌をたてまつる事によつてなりとも宸襟を慰めまつりたいという切ない思いに駆られておられたことが記しとどめられています。

この「あけぼの」の一首は既に四十年近くを経過した今

「どうしたらいいでしょう？」

「聞法一路をたどつて来ます。お呼び声も聞こえて来ます。に通ずる道が見えて来ます。お呼び声も聞こえて来ます。かすかながらも我が家に通ずる道を見出したもののみが、立ち退きの瞬間までおちついて働かせて頂くのです。」

庄松ありのままの記

「たいくしたところじゃ」

庄松、津田町神野の田中半九郎氏方にて長々世話になっていた時、主人の半九郎氏、庄松に向つて、第十八願のおころを一口に云つて聞かして下されと云えば、庄松

「親から下されるをたいくしたところじゃ」と云つた。

「ありて困る、無くて困る」

或人が庄松に向い、一念帰命のお味わいを聞かせてくれと云うと、庄松の曰く、

「ありてこまる、なけりやならぬ、たすけたまふじゃ」と、

井上善右工門

日、人々から忘れ去られているのでありましようが、私は今日こそ、この一首の深い心を国民の総てがその胸に刻まねばならぬ時だと思つたのです。異常な経済の発展と荒廃した精神の現状、そして終戦とともに誓つた平和への願い。今日の若人達にこの一首にこもる魂の声を伝えたいのです。それをいささかの年月の中に忘れ去つているところに、今日の諸問題の根源があると思わざるをえないからです。

この選歌の榮の感想に先生はこう述べていられます。

「私の母は、父と魂を一つにした妻のようであつたが、私が十一歳のとき若くして世を去つた。和歌を稽古したとみえて師匠から添削していただいた詠草数首が一冊の日記帳の間に挿まれて残っている。父は久しく師範学校に漢文を講じつつ自から詩文を作るを楽しんでいた……今はからずも、父の志しに育はぐまれた微こさい念が母の好んだ歌の道によつて至されたような気がする、これはまことにこういう不孝な身にとつて、この上もない幸福が恵まれたのであ

るのか、不思議の御恩に謝せざるをえない。

思うに「和」は是れ人類の生死を通じて常恒究竟の理想態であり、その最も達れる相において如来寂滅の内容である。……もし私どもが見る眼を転じて内を審にするならば、私どもはそこに此の永遠の理想を現実になしうべきところの唯一道が白日の如く輝かに通っているのを見出しうるであらう。何をもちか言うのであるか。云く如来寂滅の内容は本より是れ天地法界の真相相である。しかもそれは「和ヲ以テ貴シト為ス」と言いあらわされ、教として既に久しく「和国の教主」聖徳太子によりて、私共の心田に深く育くみ養われ、畏くも列聖の御帰依と世々の祖師等の弘宣とによって、この国土に親しき徳とまで成つて顕われ来つたところだからである……私どもにして此の今日の大御言に聞きまつり此の古来の教之に應えまつりつ、精進邁進するならば、そこに大道即ち開かれるであらう。此の義いささかの疑いもないのである。私の拙い一首は此の如き念をかすかに口誦んだつもりである。あわせ記して師友諸兄姉に謝す。」(昭和廿二年二月三日)

まことに謙虚にして毅然たる決意がただようていると共に、磨かれた自然なる格調の高さと美しさに、思わずこの一首を声高く朗誦せずにはおられないのであります。大戦の惨を如何に和国の更生に轉ずるか、そこに深く仏陀寂滅

アケガニ

の真理を仰がれ、そこより流れ出る和の大道が確乎として先生の自覚に輝き渡っている趣きをこの「あけぼの」の一首に痛感するのであります。

この詠歌につづいて『青蓮華』に録されている以下の数首は、当時の先生の御心を偲ばせるに足るものです。

○ 分不相向に大き

路のべにすだく虫の音おほけなしや天つみ国に通いぬるとは

チチハ

おほけなき御民の栄を父母のみ影の前に告ぐる今日かな

路のべの小川の清水花うつし流るる春も遠からなく

なほとよ、なほめま
なほのたより

その頃、私はなほシベリヤに抑留の身でありましたが、今にしてしみじみと当時の先生の胸奥を偲ぶのであります。というのは先生の御長男が東大より学徒出陣で、同じくシベリヤの奥地に抑留されておられ、その帰還を一日千秋の思いで先生は待たれておられた時なのでした。しかも遂に帰らぬ人になられたのです。

シベリヤゆ若人あまた帰りくときくが悲しも吾子は帰らず

汝が母の骨おさまれる墓の中に汝の膺の緒をいれんとす父

は

黙りをれば涙わきいづわきいづる涙けさんと書を聞くなり

シヨヒラ

慈光日誌抄

— 仏光讃嘆 —

七月六日(水)、六角会館での婦人法話会(歎異抄を共にいたたく)を終えて、例年通り、大阪・難波経由、高野山に上る。京都にくらべて六、七度は気温が低く、当初はセーターをかさねるほどでありました。

高野に上りはじめてから、本年でちょうど満三十年。したがって寺の方々は勿論、高野の通りの街の人々にも顔見知りが多く、「今年もお元気で」といつてくださる。

わたしの居室は、天徳院の離れ屋で三室をあてがわれている。この夏も仏光寺の新門さんが訪ねてみて、その閑静なことに感心なされる。朝は金剛峰寺の鐘で六時には目がさめ、七時からの御本堂での勤行にお参りする。経典は理趣経で、漢音読み。たとえば如是我聞はジョシガブン、如来はジョライである。それでも「門前の小僧、習わぬ経を読む」で、私も少しは誦読できるようにになりました。

しかし、高野山大学における毎日三時間、十五日間連続の集中講義(教育学)は、さすがに身にこたえ、もう引退

西元宗助

どきと、考えざるをえなくなりました。それはともかく、毎夏七月の過半を高野山で送らせていただけなのは有難い。それにこの夏期講座のご縁で、宮本正尊、西谷哲治、長尾雅人、故中野義照、故寿岳文章その他、当代一流の先生方と、時には起居を共にして閑談することの出来たことも、幸せなことでありました。

七月二十七日(水)の午後、花巻空港に着く。島地興霖住職ご夫婦に迎えられて、かねて耳にすること久しい盛岡市北山の名利・願教寺に到着したのは既に夕暮でありました。願教寺は島地大等師の住持されたお寺。その夏季講座は明治四十一年に始まり、今では盛岡市の年中行事の一つ。また大等師が西本願寺前門様の師匠でありだつたご縁で、その記念の植樹や九条武子夫人の歌碑などもあって境内は広くて美しい。その墓地には白井成允先生のお墓があつた。お参りさせていただく。

わたしは早朝五時からという、その早朝の講座に、いささか懸念しましたが、案外前夜は早く寐られ、その朝は午前三時には目ざめ、静座して体調をととのえ、仏法讃嘆の法話を、「人間が人間になるために」と題して、させていただけたのは有難いことでありました。

ここに「仏法讃嘆」と申しましたのは、わたしにさせていただけの法話は、一殊に在家の身でございませうから、所詮は「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ」の、聖人の御述懐のお言葉（歎異抄）を、わが身にいただいて、南無阿弥陀仏と讃嘆させていたたくほかにはないと、最近いよいよ痛切に感じているからでございます。

とまれ、その翌朝も、広い御本堂いっばいの参詣者。終了後も教育長や高校長をなさった母校京大哲学科の大先輩の松生先生御夫妻はじめ数名の先生がたが残ってください。客殿で歓談できましたことは嬉しいことであつた。

右の願教寺様の講座には、南部古代染の染色家として著名な小野三郎翁（七十八歳）のお元氣な姿も見えていました。小野さんと音信を交すようになりましてから、もう十年余になりましようか。そのきつかけは、金子大栄先生ご在世中、あるとき先生の横書きの「澍法雨」（法雨をそそぐ）

染めのあい（藍）が深く沁みついていて。それはまさしく職人の素朴な逞しい指であり手でありました。

なお、翁の奥さんの柔和なお顔をそつと見て、ハツと気づいたことは、翁のお描きなざる童女のモデルは、この奥さんにちがいないと。それで、そつと家内にささやくと、家内も肯ずいて、「センセイ、センセのあの童女の絵のモデルは、奥さまでは」とお伺いすると、翁は目を細められながら、「そうなんです。目の前にいるもんですから、つい」とおっしゃる。それを、いくらか、首をフリフリなさりながら、それでもニコニコして聞いていらつしやる、化粧気の全くない七十すぎの奥さまを、美しいなと思う。それはまさしく老いの美しさである。七人の子供を生み育てた日本の女性の美しさであつた。

翁は金子先生の御入滅の後も、たいていは御命日の前後にご入浴になって、先生のお宅を訪問なされるといふ。この人間国宝のような翁のひたむきな魂に、ひどく心うたれる。なお翁には、文学座の女優杉村春子さんの「序」のある『南部古代型染一代』という美本のご自著があるが、限定版の非売品であるのが残念。この書の中の翁の句も、翁のお人柄を示して印象深い。それは、

叱る人なきほど淋し 秋の山

を南部古代型染の紺の布地に染め抜いたものをいただいて、その美しさ尊さに驚き、その製作者が小野三郎翁なること、しかもその染めが、父祖伝統の南部古代染であることを知って、一書を呈したことが、ご縁のはじまりでありました。そしていつのまにか家中のものが小野さんのファンになってしまった。一つには小野さんのお描きなざる童女画がよい。童女であつて、どこか小観音さまの面影があつて素晴らしい。

そんなことで、このたびの盛岡行きには家人も同行。ただし家人は市内の旅館に泊り、宮沢賢治も石川啄木も又の機会にゆずって、このたびは小野翁の染彩所を訪ねたり、歓談したり、まことに楽しいことでありました。

翁が天真らんまんに仰せになったことで、感銘深いことを一つ二つ記しておく。

金子先生にお会いさせていただいて、心の目がひらけました。あるとき、どうしても仏教がわかりませんと歎いて申しあげると、理解できなくてよろしい、いや、頭で理解できないほうがよい。聴聞しておれば、いつかは必ず、手や腕の毛穴からも仏法はお念仏は、身に沁みとおつてくださると、先生は仰せになった。そのお言葉が今もなお我が身に沁みると、大栄先生いますが如く、翁は瞳をかがやかせながら、両腕をグイとさしだされる。その指先の爪には

この句は、今は亡き御母堂をよまれたものようである。それだけに切ない。

法廷にて

菊地篤三郎（判事）

芦田花子（仮名十八歳）窃盗事件

深編笠取れば

おかっぱの少女なり

青ざめし顔 暗き眼指

『弟がわが罪故に世を狭む』

便りを聞きて少女は泣けり

鈴木安治（仮名六十三歳）窃盗事件

六十路過ぎ

子には捨てられ 盗みをし

よばよばとして法廷に立つ

年老いて

よばよば歩むあはれさは

わが前の世の父かとぞ思ふ

池山先生聞き書

花 田 正 夫

たまさかに如来に面す春の風

昭和四年の春、先生が甲南高校から谷大教授に転ぜられた時、京洛の鍵屋樓上にお迎えして御講話をお願いしたまを思い浮べて記す。

芭蕉の有名な句に

古池や蛙飛び込む水の音

というのがありますが、今日諸君の自己紹介をうかがっているうちにフトこれを思い浮べました。というのも何十年何百年を経た古池には絶えず池の底から沼気と云って一種のガスが発生して泡となってブク／＼あがって来るものです。諸君は皆若くて潑刺としているのに古池などを思い出すとは一寸変なのですが、然し諸君の口からブツブツと念仏の泡の浮んでくる所から押して、決して変な連想ではない。元来念仏の沼気は十年百年の古さでなく久遠劫来の本願の底から浮び出るものだから。

さてこの念仏の浮ぶ古池に飛び込んで来た蛙が今の私の

てそうだったのではなく、向うから如来があらわれて直面させられた経験であります。

たまさかに 如来に面す春の風

これが其時の駄句です。もとより俳句にもなんにもなっていないせし、自分でもからつきしその方面は駄目ですが、妙に年に二三度こうした真似を心に感ずるままにさせられるのです。話が余談になりましたが、今日は今年になってから吹いた二度ばかりの春の風について申しませう。

○ ○

その一つは年頭状の中から部厚い封筒を見出しました。それは十年も前六高で教えたことのある学生からでした。手紙の内容は「学生時代に信仰上の話を聞かせて貰ったが、念仏も出ないし、今一つはつきりと味わえないので苦心していたところ、最近大きな人生問題に当面して二進も三進も行かなくなり、唯もう自分の愚さ罪深さを歎いていたが、其時から不思議にも念仏の有難さが身にしみ、漸く信界が開かれました」との通知でした。

かって「歳旦を先ずおとずれし念仏かな」と新年の所感を述べたことがあります、それは年の始、目をさましてまだ家の者の誰とも挨拶を交さない先に念仏の訪れをうけて例の俳句の真似をしたことがあります、今年も年頭状の中からこの念仏の訪れをうけて如来に面する思いをさせ

気持ですが、この蛙これからどう泳いで岸につくか自分も見当がつかないのです。ただ私の心の中に宿る一種の情懷、そうです、これが信仰だな！と諦忍させて貰った日からずつと今日まで持続しているその情懷を基底として心に浮ぶまを申上げるのが何時もの私の癖なのです。今日もそのお積りで聞いて下さい。

○ ○

住吉に居ました頃夕方など犬を連れて散歩していますと紫に紅に西の空を染めて夕陽の沈む莊嚴さを眺めて、ア、あの夕陽を拝むような気持で如来を拝したいものだ、長い間憧れていました。一方私の毎日の生活は何時もこの憧憬とは真反対で、前には自分勝手な問題を手一杯にかかえ、常に如来を後に廻し、こうしているまんま、こうした奴がお目当にと云った風な生活ばかり続けていますが、この不^{ほうかい}法懈怠な私が不思議にも今年になって二度ばかり如来に直面させていただきました。と云って別に私が努力し精進し

られました。

○ ○

次にはこの春死にました私の三男の臨終の枕辺で吹いて来た春の風です。

私の一家が京都に移りましてから甲南高校に通っている三男を住吉の懇意な家に預けていました。或日住吉のその家を訪れていますと、丁度外出から帰った三男の顔がすこしむくんでいる様でしたから、早速近くの医師に診せませうと、二三週間も安静にしていればよからうとのことで安心して私は京都に帰りました。すると二三日も経つたたぬで、病気が急変して重態との知らせがあり、早速住吉に参りますと附近の同信の方々も来てくれていました。そして急にいけなくなつた様子を医師からも聞きまして取りあえず病室に入りますと、神戸の長女も枕辺に居て足腰をさすつたりもんだりしていました。とても痛んでならない様子でしたが私の顔を見ると、

「お父さん、今度はどうも駄目のように思います」

と自分で死を自覚している様子でしたから、
「まだよくわからないが、そうかも知れないね。考えて見るとお母さんが亡くなってから何年になるかね。若し駄目だったらお母さんがさつと待っているよ、お父さんよ、そのうちに行くよ、云々」

と話してきますと、異状な真剣な顔をしてしきりに私の話を聞いていました。

「私は自分で正しいと信ずることは心残りなく最善をつくしました。だがこんなに早く駄目になるとは思いませんでした！」

今となっては、ただ念仏だけです。」

と云い終ると、何十年も念仏していた人の様な調子で、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と続けざまに、よどみなく念仏申しはじめました。其日は私も枕辺に坐つて長女と共に手足をさすっていました。次の朝になりますと、

「今朝は苦痛が無くなりました。気分も非常に晴々して身体も楽ですからもう手足をさすつていただかなくてよろしい。」

病み疲れてはいるが晴れやかな顔をして静かに念仏していました。

「実は隣室で東京の兄さんが輸血の準備をしているから苦痛でもあろうが、しばらく我慢をしておいで」と申しますと、

「有難うございます」

と素直に答えて、相変らず念仏にかえていました。

「世の中に親と子の上に、生別死別の悲惨事が無数に繰り返されているのに、こうしてお前も父も安心し、満足

して別れられるのは、悲しみの中にも非常に幸福な親子だったね」

と申しますと、

「みんなお父さんのお蔭です」

と微笑さえ浮べて答えました。つきぬ名残を一家揃って惜しみ合いながら、遂に息をひきとりました。生前はどちらかと言えば、唯物論的、反宗教的な思想を持っていましたが、平素何時ともなしに聞いていた念仏が臨終に開いたのです。しみこんだ念仏の力です。

私は父としてその枕辺に坐りながら、自分で死を自覚して、おだやかに帰るがごとく念仏の中に死についたわが子の姿を眺めながら、横着で罪深い私のような親に、よくも清く、美しく、崇高なこんな子が恵まれたものだといたく感にうたれました。

これが最近に如來に直面させられた二度目の春の風でした。

衆禍波転

私が念仏に帰して数年後に、家内が胃癌になって、五人の子を残して亡くなった。はじめは薬の飲みすぎで食欲が無くなった位に思っていたが、病院でそれとなしに胃癌で手の施しようもないと聞き、眼の前は真暗になり、千尋の

煩惱をぬきにした念仏は、便所のない別荘だ。天人ならいざ知らず、煩惱具足の身には、どんなに立派な座敷でも便所がなくっちゃ住めない。煩惱にあつてその念仏でこそ、我々の安んじて住める家である。

夏のきびしい昼間、氷をはこぶ車から絶えず水滴がおちるのを指差されて、氷あつての水だね、功德の水だよ、といわれ念仏は煩惱の氷のとけておちる音だねと加えられた。

念仏の風呂、阿弥陀湯には、ズツプリとつかってよく温まり、心の垢を充分に洗いおとして貰わなくてはその甲斐がない。折角阿弥陀湯がほどよい湯加減であるのに、充分に温まらないで出る人が多い。

どんな悪人をも積極的にいだいて、どんなに隔て心をもつていても、どこまでも隔てずに接することは出来なくても、せめて消極的にでも、どんな悪人でも責められないというような人があるだろうか。

歎異抄十三章に「さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべしとこそ聖人は仰せそうらいき」があるが、このお言葉

無碍というのは、碍りがなくなってしまうのではない。身にもつ業として碍りは次々に出てくるが、その碍りがあるまんま、さわりがさわりとならなくさせて下さるのだ。この事を実際の上で味わい、歎異抄の七章の念仏者は無碍の一道なりの聖人の仰せを信嘗させていたのだ。は還暦を迎えた時であった。その味わいを

たのまるるただ念仏の我にありさるべき業はさもあらばあれ

惨怛たる悔いの残せし一一の跡かたもなき無碍の一道と腰折にした。前は現在から未来、後は過去への味わいである。

昭和の初めの頃、藤原あきさんが、子供二人と主人を捨て、藤原義江のもとに走った時、新聞に雑誌に、母親の風上にもおけぬ人とか、人非人という風な非難の声が続いた時、先生は、聖人のさるべき業縁の催せばを引用されて「藤原あきさんのやったことはよくないことだが、念仏の上からは、悪いとばかりはせめられない。我々だって、何時どんな振舞をするかも知れない、その種を持ち合わせているのだから」と仰言って、念仏をしきりにしていられた。

同僚間で毎朝顔をあわせていても、調子のよい時は「おはよう」と何のこだわりもなく云えるが、すこし調子がわるいと、こちらが「おはよう」と虚心に云っても、相手がつぽを向くことがある。すると持つて生れた自負心が頭をあげて、こちらも「なんだ」と距て心になり、鼻と鼻との突き合いが始まる。

然しこうした時、聖人を思い浮かべると全く恐れ入ってしまう。こちらがどんなに鼻を高くして向つても、虚心にうけとつていただける人だから。

しよつちゆう繰り返す私の経験では、何か問題にぶつかって、心が闇くなったと思う矢先、程なく何かのきつかけで、遠くで灯台の光を見る様に、心の一角に一樓の光が

多い日は憂わしげな顔をしているのに気づいて、自分一人のためにああまで心配してくれているのかと、そのころがいじらしくなって、丁度祖父が孫の出してくれる菓子を食べるような気持で、みんなの好意を受け容れたら、何の苦もなしに煙草がやめられた。

念仏を聞くにもこのこつが役立つと思う。よき人の仰せ「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」を私一人を案じて下さって、こうまでお勧めいただいているのかと、よき人の心をおうけして、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とお称えすることが大切だ。

○ 奈良に遊ぶと道々に沢山の宿引が声をかける。

「如何でしょう、手前の宿は静かな座敷が」

「如何でしょう、湯にでも入られては」

「如何がですか、云々」

然し文無しには、それらの声をあとにして過ぎる外はない。

世界にも無数の教があつて実に引手あまたの感に堪えない。だが曾無一善の私共にはどの宿も安住所ではない。

唯、然しこの文無しを承知の上で何処までもつきまとうて、何の要求もなしに引き入れていただくこそ真実の教である。

射して、漸次明るい世界に出される。そして「わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて柔和忍辱のころも出でくべし云々」との仰せが味わえる。ここでは腹を立てた場合で、柔和忍辱と申されてるが、意気消沈した時には、明るい積極的な心に転じて下さるのである。原因によって出てくるものも種々である。

○ ある真面目な求道者が、

「長年信仰問題に心がけていますが、どうも如来も浄土もわかりません」

とお尋ねすると

「私共の持ち合せの智慧では、法蔵菩薩の御苦労も、浄土の莊嚴も神話位にしか思えません。またいくら功妙な説明をきいても、そうですかで終ります」

ただお念仏なさい。斯うした私共のためにとおうけして、すると自然に自得されるでしょう。」

○ 六高時代から煙草と囲碁は番付を作ると、大抵東か西かの横綱格にあげられたものだが、大病してから最近二ヶ月程煙草をやめている。然し別に自分からやめようなどとはからつきし思ったこともないのだが、先年大病して以来、毎日の私の喫煙量が僅かでも減っていると家族の者が喜び、

○ 小春日の午後、日向に椅子を出して新聞を読んでいると、

仔犬が側に来て遊んでいたが、静になったのであたりを見ると足下で、仰向けに寝ころんでいた。元来犬は仰向けに寝ころぶのは稀で、何時でも立ち上れる様にしているものだが、その日は「日和はよし、主人が側にいる、だから何が来ようと安心」と、安心しきったのでしよう。

○ 仰向けに仔犬ねころぶ日向かな

○ 猫はさ程にないが、犬は好きです。或日のこと動物園に行くとき、小牛ぐらいの獐猛な奴が柵の中でうずくまって居て、誰れが呼んでも見向きもせんという風態をしていた。そこで私が近づいて

「おい大将！」

と呼びかけると、のそり／＼と起きて来て

「お前さんかい」

と云った顔つきでこちらをのぞいた。これは私の犬好きな心が犬に感入したのだ。

信仰は感入だ。久遠このかた子故の廻向されるお心が、私共の胸に感入された時、「親鸞一人がためなりけり」と感佩される。



あとがき

猛暑が続きました、御無事を祈ります。

本年は池山先生にお別れして四十五年になりますので、先生の信念の根底と申せる「親鸞聖人と私」の稿をいただき、また幸に御在世中にお聞かせいただいたことどもを前後もなく誌しました聞き書を掲げました。これは先生の追悼号の「呼び鳥」の中から再記しました。

大分の眼科医で篤信の安波敷八先生の体験録は、真似目な科学者として、生活に即して誇張せずありのままに信の歩みを誌されたものであり、ことに最後の臨末の法語は貴重な記録を残して下さいました。

高原憲先生は、長崎で医を開業せられ沢山の病人をはじめ、有縁の人々に信の燈火を掲げて下さった名医であります。一高時代に近角先生のお導きをうけられ、九大医学部時代には聞法の友を沢山持たれました。長崎で開業され、今は御令息が立派に病院をうけつが

れて、ホスピットの範を發揮して下さいます。

井上先生の青蓮華は前回に続き、白井先生の信徳を讃仰して下さいました。先生は広島駅で厚燻をうけられ、焼土にあつて国の前途を御心配頂いた切々なるおこころに接することが出来、先生逝きまして十年の今日、私共の大きな燈火をあらためて仰ぎました。

西元先生は八月二日に名古屋東別院の暁天講座に出講せられ、拙庵にもお見舞下さいました。帰ってから日誌抄を書きます、このことと誠にお忙しい中で執筆下さいました。

六角会館での婦人法話会、次いで高野山の十五日間の連続の教育学の集中講座、七月二十七日には盛岡の願教寺での「仏法讚歎」等、東奔西走されての、為法不惜身命の御生活、唯々病身の私にはオロオロとして御無事を祈念申すばかりであります。

お八号あとがき

「めぐまれて生きるといのちの尊さよ名もなき草に光こぼるる」は、梅原真隆師の作と教えられました、訂正いたします。

御案内

※九月十八日(第三日曜) 午後一時半、名古屋一道会。

西隣の鬼頭康彦さん宅で催します。御来会お待ち申し上げます。

※又大谷婦人会本部(京都市下京区花屋町通烏丸西入)発行の「花すみれ」一部百円。の八月と九月に原稿を頼まれ、「慈光を身に受けて」と「久遠の友」の題で記載下さいました。御紹介いたします。

定価	半年	八〇〇円(送共)
	一年	一六〇〇円(送共)
編集・発行人	花田正夫	
電話	八二一七〇三七番	
印刷所	愛知県西加茂郡三好町大字福谷坂部光雄	
発行所	名古屋南区駈上町二ノ八八	
振替口座	名古屋六〇四七〇番	
郵便番号	四五七	

慈光社